

よんまち かけ橋新聞

yonmachi kakehashi newspaper

夏の風物詩特集

#3



北野由幸
作

静かなところほど、二上りの真髓がある。

星野さんがこんなエピソードを話してくれた。「戦後は八月十三から三日三晩踊ってました。踊り終わった時に「おい、もう終わりじゃけども、もう来年まで踊れんぞー。」「もちーと踊りたいのお。」「ほいならどっか踊りに行くか。」それでタクシー呼んで、走って着いたところが鞆の遊郭。



両脇に遊郭があって、そのむこうが仙酔島。仙酔島の上にお月様がポーンと出て、夜の十一時ごろで、シーンとしどります。その中をみんなで踊るんです。三味線、尺八、胡弓の音が響いて。遊郭のお客さんが窓から覗いてて。そこで踊ってる時に、陶酔したんです。そのとき私は、これが二上りの本髄でほんまの二上りの味じゃないかと思っただんです。静かなところほど、二上りの真髓がある。」

特集／夏の風物詩 二上り踊りと夜店

気持ちを一つに。

二上り踊りは、通りで商売をしている人たちの気持ちを一つにしてくれた。ジョイ船町の「船町宝船会」の二上り踊りは、毎年、通りの商店さんや子供たちが、まとまりのある、ほのぼのとした温かい踊りを見せてくれる。若い頃から、この通りをまとめるために尽力されてきた「だいまる」の大本巖さんに、お話を伺った。



松永で生まれた大本さんが、はじめて二上りに出会ったのは、この地にお店を開いたときのこと。

城下町の伝統文化 伝えるために。

星野さんが会長を務める古典芸能保存会は、地域の文化を子供たちに伝えるため、毎年、南小学校に二上りを教えるに行っている。四つ竹の鳴らし方、足の運び方、体のひねり方、手の動かし方、片足立ちを教える。「うまいこと踊りますよ。これはええ仲間になるわと思ってるけど、中学になったら色気も出て、やらなくなる。(笑)でも大人になって、昔、学校でやってたから踊る言う人もおるし。親がやってるのを見て、やりたいう人もある。城下町の伝統文化ですから、もつと知ってもらいたいし、ほんとの二上りを感じてほしい。」



◆福山古典芸能保存会 毎月第3木曜日と第4土曜日に旭公民館の右隣「旭ふれあいプラザ」で練習しています。習いたい方は、見学も可能なので、ご連絡ください。二上り踊りの講師も承ります。(tel.084-923-0300)

古典芸能保存会のメンバーの中には小学生の頃から三味線を習っている二十代の若者もいる。老若男女問わず、二上りの本髄に魅せられたメンバーが見せる味わい深い二上り踊りに今年も期待大だ。



若き日の大本さん

二上りと夜店は コミュニケーション

ひよんなことから、新しい動きが生まれることもある。大本さんがこんなエピソードを話してくれた。「若者と一緒に、商店街のために何かできることないかなと。でもなかなか盛り上がりなかつたんで、私が呼びかけて、一週間にいっぺんでも持ち寄りでお酒飲んで語ろうじゃないかと。それが3ヶ月ぐらいい続いたある日、若いのが一人「大本さん、せつかくこうやって集まってるんだから、何か商店街のためになることやろう。」と喋って来て。それを待ちようたんです。私がかくやうな風になって集めても、なかなか進まない。だから自然にこうか呼びかけてくれないかなと思っただけです。」



男も女も老いも若きも みんないっしょに。

的屋はいれない。町の人で作る。

これがきっかけに、それまで途切れていた夜店を復活しようと若者を中心に町が動き出した。商売が終わった後に、みんなで夜集まって、大きなパチンコを作ったり、ミニゴルフや輪投げを作ったり。みんなから本を提供してもらってワゴンで売ったりした。当時の決まりは「的屋はいれず、町の人でやろう」というもの。お店の人が自分の店の前でワゴンを出して、商品を並べた。今でもジョイふなまちは当時の流れを組んで、飲食店などが食べ物や店の前で売り、復活当初に作られたゴルフなどのゲームは今でもたくさんのお客さんを楽しませている。



大本さん提供の夜店の写真。

懐かしきさん

流しそうめん

今年も福山城コースも！ 福山夏まつり2018

二上りおどり大会 2018. 8/13 (月) 18:00 ~ 21:00 < 雨天中止 > 演舞場/福山城・中央公園・ひさまつ通り・きたはま通り



みんなで踊ろうよ！

二上り肉筆画



取材中に偶然発見された、福山藩の御用絵師の藤井松林の二上りの肉筆画。現存する二上りの肉筆画は数が少なく大変希少です。左から掛け軸の下部分、右が上部分。当時の賑わいが見える貴重な資料。(神野ガラス店所蔵)

二上りミステリー部 世紀の大発見！

二上り踊りの取材をする中で、よんまち新聞編集部は、たくさん資料を集めました。二上り踊りの起源や歴史は、未だベールに包まれている部分もたくさんありますが、城下町として二上りの本場であった商店街の老舗をまわり、また明治時代からの新聞をたどりながら、独自に調査する中で、たくさんの新しい発見がありました。その中の一部を紹介。興味のある方は、よんまち編集部まで(yasuhara@gakki.com)



大正6年9月1日中国新聞より。福山の芸妓が手拍子足拍子を揃えて四つ竹を持って、盆踊りを披露の様子が書かれている。本誌が現在調べている中で最も古い四つ竹の事実資料。

四つ竹の事実

一つ一つの動きに洗練された品と、不思議な哀愁、そこに四つ竹の音がさっぱりと通りに響く二上り踊り。決して派手ではなく、静かな踊りですが、まちに生きる人々の中に深く根ざした文化であり、さまざまな人の思いがあります。今回は夏祭り特集として、商店街にいる二上り踊りの名手を訪ねて、二上りの不思議な魅力、大切に受け継がれてきた思いと、まちの人々と二上り踊りの関わりについて取材しました。



取材から見てきた、二上りの様々な顔



はじまりはどこから？

まず、「二上り踊りの「二上り」とは三味線の調弦法のひとつで、この二上りの独特のリズムと優雅な基調で作られた三味線の音楽が、おそらく江戸期に上方から福山にもたらされたようです。踊りの由来も定かではありませんが、江戸詰め（江戸に勤務）していた福山藩士が江戸から持ち帰ったものとされています。



自由に踊りだす

この二上り調の三味線の曲が基調となり、胡弓、尺八、鼓が加わり、武士も町人も夕涼みの姿そのままに自由に踊って楽しんだのが現在の二上り踊りの原型となったようです。盆踊りの一種なので、亡くなった方の魂を弔う意味もあり、亡くなった方の初めてのお盆（初盆）に、その家やお墓の前で夜遅くまで踊りを楽しんだ背景もあったのではと考えられます。



四つ竹の出現

武士は刀を預け折笠で身分を隠し、町人も手に団扇を持ち踊っていました。その後、団扇の代わりに四つ竹で拍子をとりながら踊る現在のスタイルになりました。四つ竹は出現については諸説ありますが、少なくとも大正期にはすでに四つ竹に移行されていたようです。（大正6年9月1日中国新聞より）



優雅な曲に独自の形

自由に踊ったのが始まりなので、今でも基本のステップ以外は組により様々で、独自の形で踊られています。毎年、お盆の時期に、三味線、尺八、太鼓の優雅で哀愁のある演奏に、四つ竹で拍子をとりながら福山の中心市街地を、地元の企業や様々な団体が踊りながら練り歩きます。



ぴしっと揃ってない。それが本来の二上り。

そう語ってくれたのは、江戸時代から続く老舗としてきたはま通りに『紀伊國屋結納店』を構える星野由幸さん。二上り踊りの名手として知られる星野さんは、子供の頃からこのまちで育ち、二上りを踊り続けている。県の無形民俗文化財への登録にも尽力され、現在は古典芸能保存会の会長として、変わらない趣のある踊りを見せてくれる。

「江戸時代は三味線を弾きながら、お盆に夕方から夜にかけて、仏様の供養に流して歩いたんですね。涼台で涼んでいた人が団扇を持ったまま



何とゆうことなく勝手に踊りだしたんです。見よう見まねで踊ったのが始まりですから、個性を生かした踊り。ぴしっと揃ってないんですよ。それが本来の二上り。」
体が自然に動く。手も足も。なんも考えてない。
星野さんと二上りの出会いは昭和二十三年の十七歳の時。店の前をちようど近所のおじさんが踊っているのを見て、やってみたいくなり、見よう見まねで後からついて踊ったのははじまり。それから約70年間踊り続けている。二上り踊りは、単調なステップで一見簡単そうに見えるが、熟練した人の動きほど、真似しようとしてもなかなか上手くできない味がある。



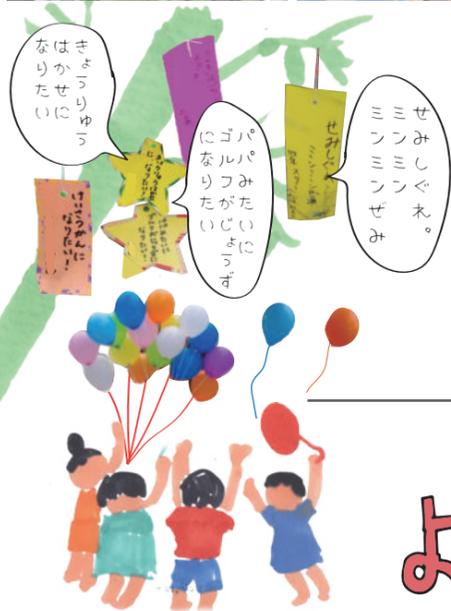
星野さんの家から発見された本誌の表紙にもなっている二上りの版画。この版画は、三好重右工門という人が福山藩の御用絵師 藤井松林に依頼し配ったもの。三好一族は、織田と戦をして破れ、福山に逃げてきた徳島の豪族。星野さんの説では、この三好一族が、阿波踊りをもたらしたのが二上りのルーツだと。

ひとつの版画がきっかけに。

昭和36年に、二上りは大きな転機を迎える。県の無形民俗文化財への登録だ。戦火で焼けた資料が多い中、星野さんの家で発見された古い二上りの版画が貴重な資料となり、県無形民俗文化財に認定され、文化保護と継承に繋げることができた。



←きたはま通りで、銅像にもなっている星野さん。二上りのステップの足型もあるので、ここで練習するのもいいかも！



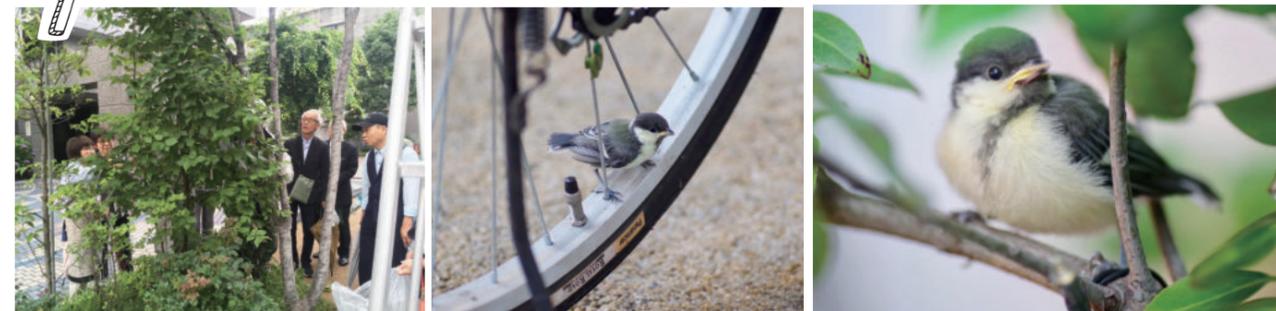
天まで届け。私の願い

6月から7月にかけて本通り商店街では夏の風物詩、七夕祭りの準備が進みました。雨の中、商店主さんが集まって切ってきた大きい竹、小さい竹に、毎土夜店でたくさんの人たちが書いた願い事と、市内の園児の願い事が飾られ、通りの店先にたくさん並びました。7月7日の七夕当日は雨でしたが、たくさんの子供が来てくれ、願いごとを風船にたくし、夜空に飛ばしました。

商店街のちいさな幸せみつけた!

よんまち百景

7



商店街でシジュウカラ誕生

暖かくなり、緑に溢れたとおり町ストリートガーデンに小さな生命が生まれました。巣から出てきたのはシジュウカラのヒナ。木に止まりながら通り行く人をじっと見たり自転車の車輪にとまったり近所の子供と遊ぶなどなんとも可愛らしい光景。そのあと元気に旅立ちました。いつかこの町を訪れてくれるかもしれませんね。そして

とおり町交流館前には、何やら人だかりが。通りに植えている樹木の手入れ法について、町の人が集まり、学んでいました。歩いていると気持ちいい緑に溢れた通りはみんながこうやって、それぞれお互いの店の前にある樹木を日々手入れすることで実現するのですね。店先に植えられたいろいろな樹木は、この通りの人の気持ちを一つにしているような気がしました。



家で生き生きし
元気に過ごしてもらうため
この場があるんです。

商店街の人たちに
会いに行く。

JOYふなまち
福康メディカル有限会社
機能訓練型デイサービス
HOSPOさぬき船町店

取締役

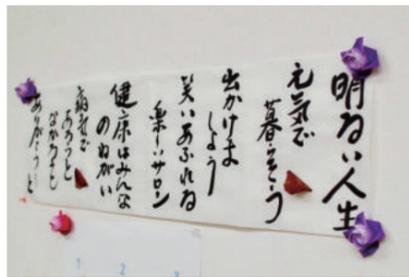
福島 睦さん



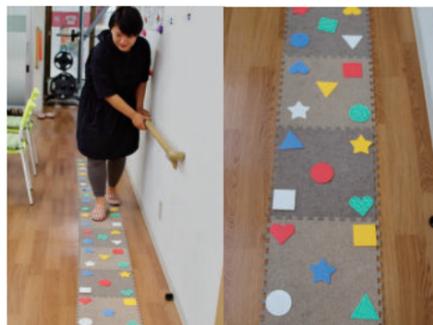
依頼人
神野ガラス店 神野さん
「みんなの元気を支える場所!」

元気になるために商店街へ行こう。こういう言葉が当たり前になるかもしれません。ジョイ船町で、機能訓練型デイサービスを運営している福島さんをたずねました。

「この施設の特徴は、運動によって歩けなくなった人が歩けるようになる。元気に日常を送れるようにすることです。」福島さんの実家は、施設の建つこの場所。ラグビーに明け暮れた高校時代、怪我をきっかけに柔道整復師に興味を持ち、高校卒業後、大阪の専門学校へ。大阪で整骨院を開業した後、実家で家業のさぬきうどん店があったこの場所の二階で整骨院をスタート。「患者さんで歩けなくなったりした方が家にこもる。そうなる施設に入らないといけない。長くやっていると、そうゆう方が段々増えてきて、だからそうゆう人が元気になるために、運動できる場所を整骨院と併設しようと思ったんです。」二階は整骨院、一階はデイサービスの空間。来た人はまず血圧などを



壁には、力強いタッチで書かれた言葉が。商店街のさぬきうどん店の奥さん(福島さんのお母様)の元気の出る直筆。



同じ色のものや、同じ形を踏みながら歩いたり、組み合わせ自由に、歩きながら脳を鍛えられます。意外と難しいけど、ゲーム感覚で楽しい。



自分にあった重さに調整して鍛えられます。ダイエットにも効果がありそうですね。



いろんなマシンが揃っています。ちょっとした運動で心持ちもだいぶ変わります。無理なく定期的に続けることが、元気な体作りには大切。



機能訓練型デイサービス
HOSPOさぬき船町店
広島県福山市船町4-7
TEL.084-91-2334
営業日月～金、祝
営業時間 8:15～17:15
サービス提供時間
8:45～12:00 / 13:00～16:15

チェックし、準備体操を行って腕や足を鍛えたりするマシンで運動をする。疲れたらストレッチ。パソコンを使っての認知症を予防するための脳トレ、家で一人でお風呂に入れるための練習も兼ねた浴室まであります。やってみると若者でもハードな内容。何時間かのトレーニングが終わると、送迎で帰る。

「96歳で昔ボクシングやっていてたってゆう人もいて、みんなそれぞれ目標を持ってやるようにしています。歩いて天満屋に行けるようになりたい、とかね。福山ではこうゆうデイサービスはまだ浸透してなくて、1日預けるって感覚が主流なんですけど、関西は逆にこうゆうスタイルが当たり前になっていっているので、もっと浸透して行けたらと思います。」商店街とゆう場所も、懐かしがる方も多いそうで、「散歩させてえ」と、外を歩きに行く方もいるようです。

福島さんの今後の展望は、障害を持った子供達の放課後デイ。そうゆう子供達に関わってきた経験から、体を動かすことがストレスの軽減につながることを知り必要性を感じたそうです。あらゆる人が元気に生活できるために、人が集まる商店街というのも、素敵ですね。

怖いけど楽しい。
レトロな手作りお化け屋敷。

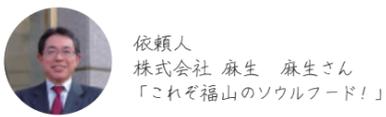
商店街の夜店でお化け屋敷の記憶がある方も多いのではないだろうか。昭和55年頃、本通船町商店街で先駆けてお化け屋敷をした元エミヤレコードの西谷さんのエピソード。当時の夜店は、各商店の店主が自分の店の出し物を考え、競い合っていた。射的や輪投げ、金魚すくい。アイデアマンの西谷さんは、他にない面白さを求め、釣り堀などいろいろ考えた。

「その時、ちょうど秋に取り壊す予定の建物があって、好きなこととしてええよって言われて。じゃあお化け屋敷しよう！ってなったんだよね。」そこから商店街らしいノリ。ろくろ首などのお化けや、室内の飾り付けなど、バイトの学生や町の人が自ら面白がつて作ってくれた。

「面白いマネキンも貰い、お化けや衣装などは、近所の木綿屋さんが、編んでやる！」と作ってくれた。お化け屋敷はまさかのヒット！新聞にも紹介され、連日たくさんの方が並ぶ人気の出し物となった。「バイトの学生さんには、気の弱そうなもんは脅かすな。若い男はいくらでも驚かしてええって言って笑えりかつたなあ。」町の人の手作りお化け屋敷。復活できたらおもしろそう！

商店街の人たちに会いに行く。

JOYふなまち
大衆食堂 稲田屋
五代目店主
稲田正憲さん



依頼人
株式会社 麻生 麻生さん
「これぞ福山のソウルフード！」



私が飯の話をしたらなぜかみんな「腹が減ってきた」って言うんです。



食べ物の話になると、テンションが上がる稲田さん。うどんの上に肉を乗せウスターソースと一味をかけていただく、まかない飯を教えてください→

通りを歩いていると、いつもいい匂いする。稲田屋さんの関東煮の匂いだ。地元なら知らない人はいない、100年近く続く店を今に伝える五代目店主の稲田さんを訪ねに行きました。創業は大正8年。当時はうどんがメインで、現在の関東煮は昭和の初め、ひいお爺さんとお爺さんが大阪で習ってきたもの。肉井は戦後、お祖母さんが作ったもので、代々が作ってきた味が看板メニューとして並ぶ。様々な時代をくぐり抜けてきた秘訣を尋ねると「いいお客さんに恵まれた。それに尽きると思います。味も時代によって多少は変わってます。最近素材の持ち味を考えて味を調整したり。昔からのお客さんはすぐ気づく(笑)でも何らかイメージに収まってるから来てくれるんだと思います。ここに行けばこれがあるってゆうのを大切にしないと。」一方で新しい味への研究も尽きない。ご本人曰く稲田屋のイメージに合わない「不真面目メニュー」を開発中だそう。その中の一つのハンバーグセットは、昭和レトロなイメージの限定品。



写真館をしていたお父様が撮った昭和の福山の子供達の写真。「一番いい時代だった」と振り返る。



昭和の飯屋の雰囲気漂う店内。机に座って、ゆっくりこの雰囲気を味わいながら食べたい。



何十年も付け足している門外不出の関東煮のたれ。「実は焦げ付かせたことがあります。」と驚きの新事実。



字体まで美味しそう看板。稲田さんの不真面目メニュー「限定ハンバーグセット」も食べてみたい。



大衆食堂 稲田屋
広島県福山市船町1-18
TEL.050-5287-8896
昼11:00~14:50 夜16:00~20:00
毎週木曜日定休
不定期で休みをいただくこともあります。
関東煮、肉どんぶり、うどんなど

「私らが子供の頃は、周りに飯屋って結構あって、でも最近は減ったから。あくまでもサブメニューとしてだけど、他の楽しいメニューもあっていいんじゃないかなと思うんです。関東煮や肉に馴染みがない方にも美味しいものを食べてもらいたい。」昔ながらの味を守りながら、一方で時代や環境にも応じる。これが長年の商売で磨かれた、愛される続ける老舗の絶妙なバランス感覚なのかもしれません。「当たり前ものだと大型店で事足りちゃわないと、難しい時代です。私は商店街は、通りの後ろ側に人が住む町であってほしいなあと思ってるんです。周りに人がたくさん住んでいることで、気の効いた町、洒落た町になると思うんです。」稲田さんの人生は常にお店と一緒にある。「自分も稲田屋。おばあさんがそうだったから俺はそんなになんか思わないなあと思っただけ、やっぱりね。古い店を伝えていくには、それしかなかった。だけど、子供を大学に行かせることができたのは誇り。孫ができたなら、お爺さんがどういふ顔をしていたかを覚えておくまで生きてたいですね。自分はお爺さんの顔記憶にないから。あのそぞじでも何でもいいから(笑)」



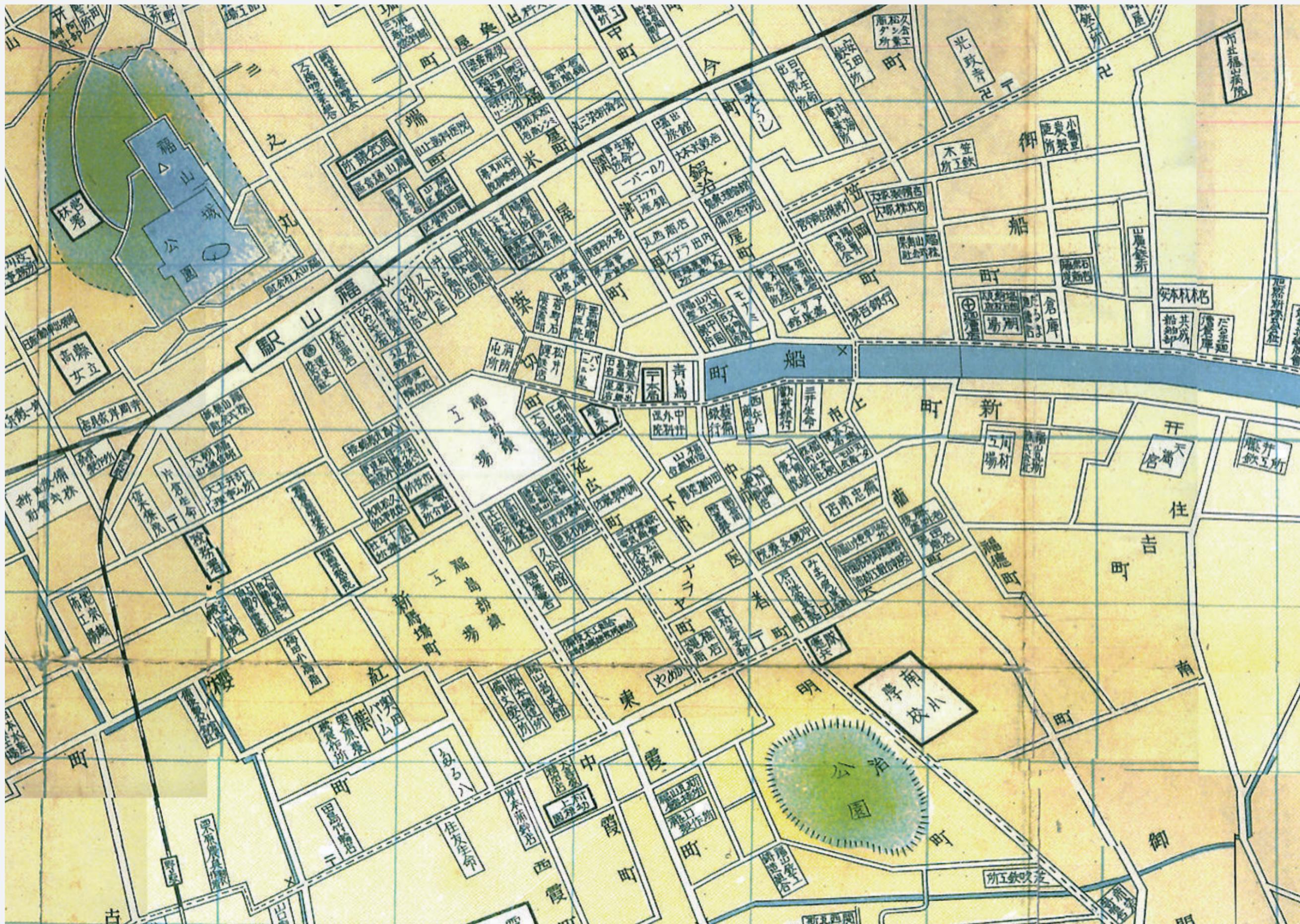
再現 昭和のお化け屋敷
福山本通船町商店街振興組合
福山市商店街振興組合連合会専務理事
西谷浩孝さん

お化け屋敷をやる前には神社にお祓いを済ませるのが業界の通例のようです。「やっぱり不思議なことはあったよ。近所のおじさんが生首に使うマネキンの首の色塗りをした時の話で、階段の下の段に、マネキンの首を置きながら塗ってたとき、ちよっと足りないものがあるからって、一瞬その場を離れたみたい。それで帰ってきたら、さっきまで置いてあったマネキンの首が無くなって。あれ？おかしいなって探してて、ふっと上を見たら、なぜか下の段に置いてあったマネキンの首が、一番上の段で、おじさんを見下ろしてる！誰も来るようなところじゃないのに。不思議だねって。」そんなことがあってから、念のため、ちゃんとお祓いをしてもらい、そのあとは怪奇現象はなかったそうです。

ほんとはあんたの怖い話
～生首事件の怪～



懐かしのシリーズ 昭和十五年の福山中心部古地図 (商業地図)



昭和15年の出来事 戦時色が濃くなる時代。【内閣】第2次近衛文麿内閣【政治】大政翼賛会が結成【国際】[英]ウィンストン・チャーチルが首相に就任。【仏】ラスコー洞窟で旧石器時代の壁画を発見。【経済】東京の食堂・料理店、米食使用禁止、販売時間も制限。外国名の排斥でたばこ改名、「ゴールデンバット」は「金鷄」、「チェリー」は「桜」に。【暮らし】国民精神総動員本部が「ぜいたくは敵だ!」の立て看板1500枚を東京市内に設置【話題】東京のダンスホールを閉鎖。【ファッション】国防色(カーキ色)の国民服が奨励。「パーマメントはやめませう」運動。【建築】「ぜいたくは敵」の風潮のなか、鹿鳴館を解体。【流行語】「零戦」【話題の本】三国志(吉川英治)吾が闘争(ヒットラー)牧野日本植物図鑑(牧野富太郎)【誕生】加藤一二三[将棋棋士](1.1)王貞治[プロ野球] 麻生太郎[首相] ジョン・レノン John Lennon[英、ビートルズ] ブルース・リー[米、俳優]【映画】チャプリンの独裁者 ファンタジア(ウォルト・ディズニー)

よんまち新店

よろしくお願ひします！
近年、開店されたお店を順々にご紹介します。

肉料理 Zushio



本通商店街に今年1月にオープンした肉料理ズシオさん。
ヒレとロースをメインに、ステーキ、宮崎牛のシャトーブリアンや、佐賀牛のロース、いちぼ、さがりなど、店主の大橋さんが、その日仕入れた一押し素材やさまざまな希少な部位が、最高の状態で楽しめる。その日によって仕入れ、仕込みが変わるので、夕方にメニューは出来上がる。
この道25年、様々なジャンルの料理を学び、都での料理長の経験を経る。素材によって違う、肉の焼き方・切り方・厚み・焼き方・食べ方・出し方、常にその素材を一番美味しい状態で出すことに全神経を注いでいる。
「料理は全部目に通す。誰かに任せないといけなくなる時がくれば、店は終わると思ってます。」ワインは入れ替えもありながら、300銘柄ほど揃えている。ボトルそれぞれに値段・味わい・産地が書いてあり、来た人がそれを見て自分で選べる。店内60席、テラス10席の広い空間に、パテシエの友人が描いた春夏秋冬の生命力のある絵が包み込む。
「うちのお店は、自由度があると思います。みんなでわいわいできるし、個人でも、家族でも、扉を開けたら皆さん自由に。肉のパワーフードを食べて、空間や音楽にも癒されて帰っていただけたらなあと思います。」

Pekárna Sorairo ~そらいろ~



本通商店街に今年5月にオープンしたパン屋ペカールナそらいろさん。
こだわりのフランスパンをはじめとした、ハード系だが、噛めばしっとりとした柔らかい生地。ベーコンやチーズ、ナッツやドライフルーツなどのシンプルな具材と合わさり、噛めば噛むほど小麦粉本来の旨味を楽しめる。店主の清水さんは、18の時、1ヶ月チェコに滞在し、その後自転車で日本一周を試み、そしてイギリスへ。様々な文化や人に触れながら、自分の道を模索する。日本に帰り、農業を学んでるとき「パン屋になろう」と思い立ち、各店で修行を重ね、その後、石窯を作り、休日に近所の人たち、子供やお母さんとパンを作って石窯で焼いた。その美味しさに衝撃を受ける。
「パンと一緒に作って、自分で発酵して、石窯で焼いて、外の芝生でみんなで食べるパンは世界一美味しい。そんなパン屋にしたい。」その夢の通り、8月1～16日の期間は、パン屋からパン教室に切り替え、親子でコミュニケーションしながら、パンを作る「パンと話そうこねるスクール」を開催する。
「パンは微生物のおうち。パンを作る時、僕はいつも、微生物の居心地の良い空間を作っていると考えています。そうするとパン本来の美味しさがでる。これって生命のやりとりで、そうゆうこともパン教室で伝えたいです。」



肉料理 Zushio
720-0044
福山市笠岡町2-1 スガヘイビル1F 本通商店街
店主：大橋 一志 ☎080-4262-8600
定休日：毎週月曜・第1日曜
17:30～22:00 鉄板料理オーダーストップ
22:00～24:00 バーラウンジオープン
※7/26より、アフターバーラウンジをオープン



Pekárna Sorairo ~そらいろ~
720-0046
広島県福山市今町2-2 本通商店街
店主：清水 照久 ☎084-923-0133
8:30～18:00 ※日・月定休
8/1～16まではパン教室のみ
22から通常営業

よんまち とは？

中心部東地区・4つの商店街地域が手を結んで「福山らしさ」を発信しようと2017年の6月に発足した、「福山駅東地区4商店街連携協議会」の通称を「よんまち」と名付けました。
4つの商店街とは「きたはま通り商店街」「船町宝船会商店街」「本通商店街」「本通船町商店街」で、この4つの商店街は、江戸時代に作られた2つの橋、「木綿橋」と「天下橋」という橋を共有しながら、城下町の中心地として、栄えてきました。このきずなを大事にして、「地域の懸け橋、未来への懸け橋」を合言葉に各々の個性を発信し、福山の中心部東地区の活性化に連携して取り組もうとしています。

編集後記
ヘンシュウ
コフキ

今回のよんまち新聞にご協力いただいた方々

資料提供：星野由幸さん(紀伊國屋結納店) 大本巖さん(だいまる)
取材協力：星野由幸さん(紀伊國屋結納店) 大本巖さん(だいまる)
稲田正憲さん(大衆食堂 稲田屋) 福島 睦さん(福康メディカル(有))
西谷浩孝さん(エミヤ) 大橋一志(肉料理 Zushio)
清水照久さん(Pekárna Sorairo ~そらいろ~)
その他多くの方に、二上りの資料の提供いただきました。ありがとうございます。

写真撮影：安原幸雄((株)安原楽器) デザイン・イラスト 木村桃子

